

淀水垂大下津町遺跡 — 淀津推定地出土の遺物 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 淀水垂大下津町遺跡 1次調査区を遠望する(北から)

はじめに 2021年11月から2022年3月にかけて、京都市伏見区淀水垂町よどみずたれちようの桂川右岸河川敷に所在する淀水垂大下津町遺跡よどみずたれおおしもづちようの発掘調査を行ないました(写真1、図1)。調査予定地が広大であることから、複数年にわたり調査を実施する計画です。今回はその1年目で、調査の結果、この遺跡では弥生時代から明治時代の長期にわたり、人々の営みが続いていたことが明らかとなりました。

淀津とは 調査地は平安京・京都の外港として栄えた淀津の推定地です。「与等津」(淀津)が史料で初めて確認できるのは、『日本後

紀』延暦23年(804)7月24日の桓武天皇による行幸の記事です。11世紀初め頃には「東西淀」の表現が史料にあることから、当時の淀は桂川を挟んだ両岸を含む広がりをもっていたと考えられます。

中世になると、淀津には淀魚市が成立し、西国や畿内から京都へ運ばれる塩や海産物などをはじめとする様々な物資を取り扱う拠点として大いに賑わいました。室町時代後期は「千間(軒)在所」(『大乘だいじよう院寺社雑事記』延徳2年(1490)3月5日条)と記されるほど人家が密集していたようです。

安土桃山時代に、豊臣秀吉の伏

見城建設に伴い、伏見の地に港を整備すると、京都の外港としての機能は淀津から伏見港へと移ります。しかし、江戸時代以降も淀は淀川河川交通の主要な中継地として港湾機能が維持されており、調査地が位置する桂川右岸の水垂村は、同じく左岸の納所村とともに二十石船の基地として活況を呈しました。

調査成果 調査地は桂川の河川敷という立地にもかかわらず、弥生時代以降約2,000年にわたって堆積した土層が、河川の働きによって削りとられることなく積み重なっていました(写真2)。そのた

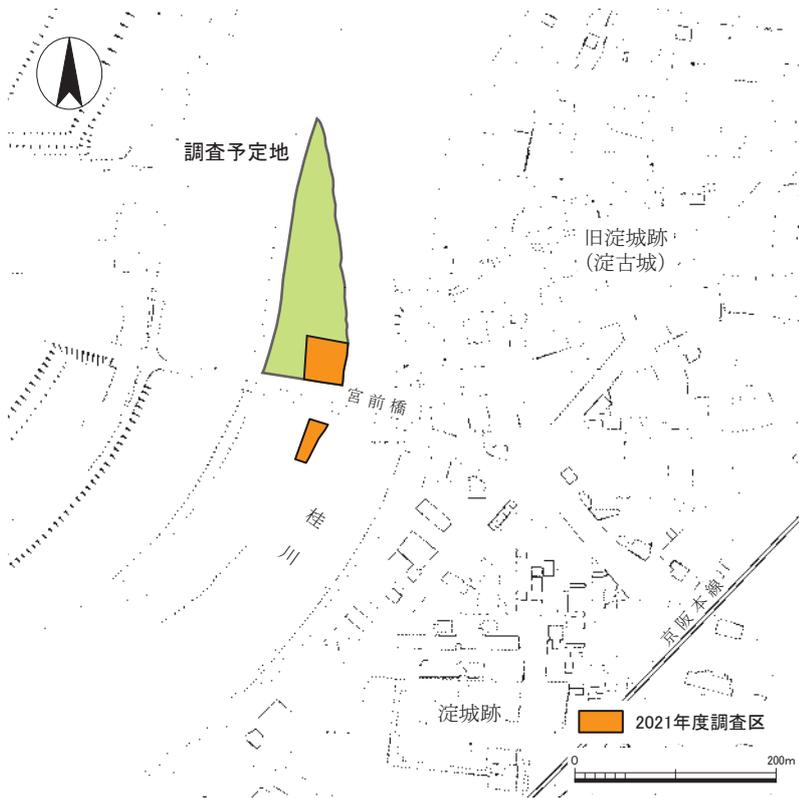


図1 調査地位置図



写真2 弥生時代から江戸時代の土層堆積

め調査では、堆積した土で保護された様々な遺構と遺物を多数発見することができました。今回はその中でも調査地の特徴を示すと考えられる遺物について紹介します。

ひとつは、平安時代後期の巴剣とえけん頭文軒平瓦とうもんのかみひらがわらです(写真3)。この瓦は平安京北郊の岩倉で作られたものです。堀河天皇が白河の地に建立した尊勝寺(ロームシアター京都周辺)出土の瓦と同じほん範(型)で作られています。他にも、讃岐(香川県)や播磨(兵庫県)産の軒瓦が出土しました。

今回出土した瓦は、調査地に瓦葺きの建物が存在することを示すものか、それとも他の地域から京

都に運び込まれる途中で調査地に残されたものかはわかっていません。しかし、平安時代の瓦は寺院や役所で使用されるものであり、一般的な集落ではあまり出土しない遺物です。このような遺物が今回の調査で一定数見つかったことは、調査地の特殊性を示しているのではないかと考えています。

もうひとつは、古墳時代初頭の土器です。出土した土器を詳しく調べたところ、遺跡がある山城(京都府)で作られた土器だけではなく、東海地方や河内(大阪府)で作られた土器(写真4)が、調査地に搬入されていたことが明らかになりました。

これらの搬入土器は、調査地が遠隔地からの人の移動や物流の拠点であったことを示すものです。調査地が、淀津の成立以前から、桂川や木津川などの河川が合流する交通の要衝に位置することが大きな要因でしょう。

おわりに 今回の調査成果の一部を紹介しましたが、他にも取り上げたい遺構や遺物はたくさんあります。調査はまだ予定の1割ほどしか終了していませんが、今後の調査によって、これまで詳細が不明であった淀津の姿にどれだけ迫ることができるのか、期待がかかります。

(松永 修平)



写真3 巴剣頭文軒平瓦



写真4 河内で作られた土器